

# 紅唐子の調査報告

東京 江戸椿研究会 野口 慎一

## 紅唐子の調査報告

今回の紅唐子の調査では茨城つばきの会の山田長政さんに取手市のお寺を案内してもらいました。去年の10月にこのお寺に紅唐子の大木が有るので、見せてもらっていたので二度目の訪問となりました。春からの農作業が一段落して少し時間ができたこともあり、もっと詳しく調べたいという思いが強くなったのです。土地勘の有る山田さんの協力によって、数々の新知見を得ることが出来ました。

またこの調査にあたり、高源寺の一磨和尚には格別のご配慮を賜りました。さらに、各自治体の関係者、団体やお寺の関係者、水戸椿の会の方々には多くの御教示をいただきました。また初対面にもかかわらずお話いただきました小松崎さん、小沼さんにもお時間をいただきました。ここに記して各位にお礼を申し上げます。

## 高源寺の椿

普蔵山高源寺はケヤキの古木（地蔵ケヤキ 昭和14年に茨城県の天然記念物に指定）がある事でもよく知られた臨済宗のお寺です。創建は931年(承平元年)と伝えられている古刹で、一説には平将門にゆかりのあるお寺とも言われているそうです。近くにはその最後の地という伝説があります。

地蔵ケヤキを背にして、本堂に向かって左側の通路のすぐ横に紅唐子の木は植えられています。通路からななめに小さな崖の様に高くなっている斜面に立っているので通路側は根が露出しています。近くに保存樹木58号平成9年指定(取手市)の立札が建てられています。

2010年の資料1(取手市の巨木と名木)によると、樹高15m、幹回り1m95cmとなっています。試しに山田さんと測ってみると、根本から少しずつ上にむかって細くなっていて目通り付近で大きく二股に分かれるように枝が有るためにまた太くなっていて、この付近で幹周り1m95cmでした(写真1)。根元から10cmのところでは180.0cm、1mぐらいの高さで最も細く、175.3cmでした(2018年8月20日)。木の高さはとても15mもあるように見えませんでした。崖を少し上って木の上の方を見ると少し枯れている枝が有ります。紅唐子の斜め上の檜の木が大きく育ってきていて椿の芯に日が当たらなくなっているのが原因のようです。以前はまっすぐ伸びていたと言います

が、木の上部は力を失っているように見えます。



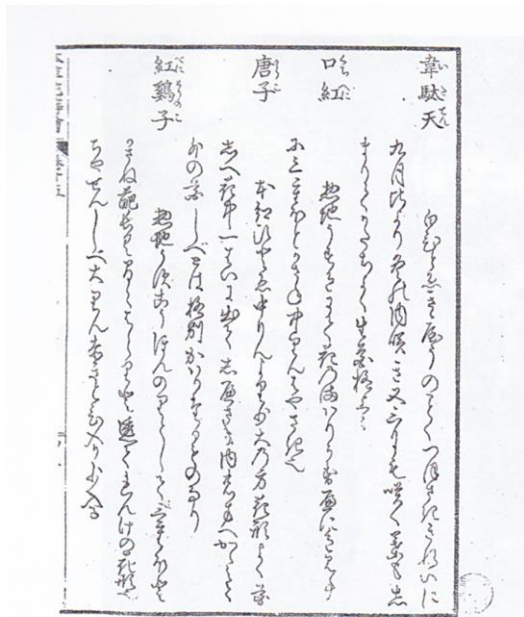
写真1 高源寺の椿 計測の様子 (右 山田長政氏 2017年9月15日)



資料1 高源寺の椿 取手市の巨木と名木（取手市緑化推進委員会発行）

### 紅唐子の系譜

唐子咲という呼び方のもとになった独特の花形は秀逸で現存する古典的な椿の園芸品種の代表的なものと言ってよいでしょう。その起源は室町時代にまで遡ることができる古いものと考えられます。（著者は葉や花などの形態的な特徴から中国原産のセッコウコウサンチャの血を引く古い交雑種の系統ではないかと考えているからです。）そうするとこの椿はこの地に植えられた当時何という名前と呼ばれていたのでしょうか。紅唐子の名前はずっと後にならないと現れない比較的新しい品種名であるからです。本草花蒔絵（伊藤伊兵衛 1739）などに載る「唐子」が紅唐子となったようです。（資料2 「本紅一重中輪より少大の方花しへ花中一はいに出てしへさき内の方へかかえて外の花しへとは格別かはりたるものなり」）



資料2 本草花蒔絵 (1739) より 唐子



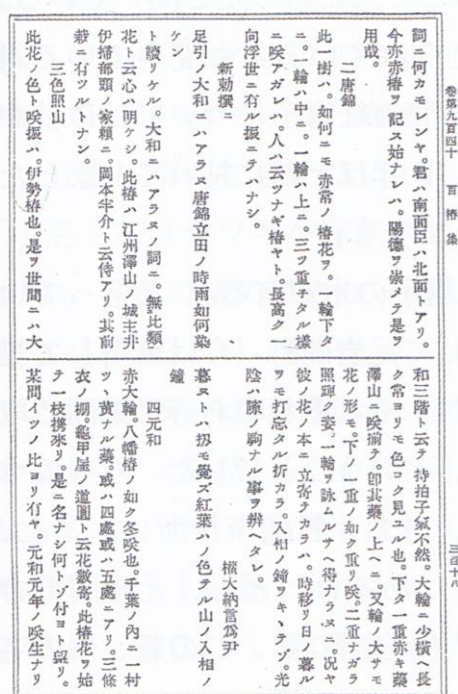
資料3 伊勢椿 椿花図譜より

椿花図譜 (1700 年頃) にある伊勢椿が紅唐子にそっくりですから、これこそが後の紅唐子でしょう。「伊勢」(32 図)、「伊勢椿」(278 図)、「赤伊勢」(418 図)の名で 3 図も載っていますから当時から名花として知られていたと考えられます(資料 3)。この高源寺の椿品種が知られるようになったころ、つまり、近世初頭の資料、百椿集 (1630 年 安楽庵策伝) にも伊勢椿は出てきます。

百椿集の書き出しに、策伝和尚が堺の正法寺に住んでいた頃(1594~1614) 見馴れぬ赤椿を持って来た者があったが、その名を聞くと「伊勢椿」というのを求め兼ねたと書かれています。しかし伊勢椿の花の形については触れていません。本文では、赤椿ノ分 三「色照山」について「此花ノ色ト咲振ハ伊勢椿也」と書いています(資料 4)。また、咲分 咲交 飛入之分 三十二「金杯紅盤」も「赤キ伊勢椿ノ五葉ノ如ク中輪ニ咲テ」などと書いて



いますが、その後続く説明を読むとどれも紅唐子とは違う花のようです。策伝和尚が見た「伊勢椿」は紅唐子形の花ではなかったのでしょうか。集めた百品種の中に紅唐子(伊勢椿)を思わせる花はどれかよく分かりません。白玉之分十二「白フノ鷹」についても、世間の人々が皆「白伊勢」と言っている事に異をとなえているのも私には納得がゆきません。見事な白花弁白唐子咲なのですから赤の唐子咲の伊勢に対して白の伊勢というのは全く無理のない呼び名であると思います。しかも和尚は全てのタイプの花形を集めたと言い切っているからです。紅唐子のような典型的な赤花弁赤唐子咲の花が、大阪堺には有ったのにこの当時まだ京都では手に入らなかったというのでは辻褄があいませぬ。(そういえば今のト伴らしい花(赤花弁白唐子咲)は、咲分 咲交 飛入之分 三十五「観音寺椿」です。)



資料4 続群書類従(塙保己一編)より百椿集の色照山

樹木大図説(上原敬二著 1961年)によると、「いせつばき」は「f. Boku-han Makino」と記されています。牧野富太郎氏はト伴に伊勢椿をあてているのです。つまり、ト伴の和名を伊勢椿とし、ラテン名にボクハンを用いているのです。

またト伴は「入唐の僧が中国より持ち帰り伊勢国ト伴寺に植えたので当時の株が残っているという。」(俗説?野口)という事も記されています。そして大和本草批正(小野蘭山述)の石榴茶をト伴であるとしています。

大和本草批正の石榴茶の記述は「下二大花びら五弁アリテ上ニ小花びら数片アリ俗ニ伊勢ツバキト云」となっています。椿花図譜をみている者としては

この記述はト伴ではなくまさに紅唐子でしょう。ト伴と伊勢椿と紅唐子については研究者の発言を整理して理解する必要があると思います。椿花図譜ではト伴らしい花はいくつもの違う名前(兵庫 伊駒中白など)で載っていますが、伊勢椿の名でト伴らしい花はありません。つまりト伴のような唐子部が白い赤花卉の花を中白伊勢などと呼ぶことはなかったようです。

## 二本の紅唐子

この高源寺の椿はいつ頃この地に運ばれてきたのでしょうか。「和尚さんによると 350~60 年前に京都東山のあるお寺から持って来たものだと聞いている。この椿はもう一本あり、それは岩間の寺に植えられているとも聞いている。」(山田氏)ということでした。山田さんはこの岩間の紅唐子については以前から知っていたそうです。しかし、残念なことに 10 年ほど前に枯れてしまったことを和尚さんに伝えると驚いていたそうです。

高源寺の和尚さんが「岩間のお寺にも別の紅唐子の木が有る。」と言っていたと聞いたので、私は笠間市の観光協会に電話して元岩間町(今は合併して笠間市になっている)のお寺の情報をもらいました。それぞれのお寺に電話で取材しましたが、どのお寺にも椿の大きな木はないということでした。六寺のうち一寺は連絡が取れませんでした(8月5日)。さて、笠間市役所によると、下郷 1366-3 の鹿島神社にツバキがあった記録はあるけれども、元岩間町の指定保存樹にお寺の椿はなかったといえます。(生涯学習課)、この時、個人宅の五霊の椿を教えられました。県指定の天然記念物にも指定されていたということでした。「岩間の歴史」(平成3年)によると、元岩間町の指定保存樹でもあり、樹齢 300~400 年 幹周り 1m95cm 高さ 4.85m 品種名は紅唐子だそうです。(生涯学習課)一方茨城県の教育委員会で話を聞くと、昭和 59 年指定された県の天然記念物でしたが枯死したため平成 19 年に解除されています。

1978 年頃から弱り始めていたとの事で、平成 10 年、大規模な外科手術及び樹木保護事業を行い経過観察していたものの年々衰弱してしまい、平成 17 年には花も咲かなくなり、平成 19 年枯死を確認しているということでした。

幹内部はオオミコダケ菌に侵され幅 3~4cm を残して中は空洞化していたという平成 15 年の調査記録(森林総合研究所)があるそうです。

県の記録では幹周り 164.7cm 樹高 6m となっています(文化財課)。

## 五霊の椿

この椿について情報を求めていたところ、水戸椿の会のご厚意により、同会の会員であるこの椿の持ち主小松崎さんの電話番号を聞くことができました。

小松崎君代さん(笠間市泉、旧五霊部落)に電話でこの椿についての話を聞

きました。「関西方面に先祖が旅行するのが好きだったようです。お墓に何度もお伊勢参りをしたことが書かれています。木は抱えきれないほどの太さでした。藁葺きの長屋門を取り壊した所、急に枝が枯れはじめました。樹木医の指導の下で手入れをしたのですが、とうとう枯れてしまいました。伊勢方面から持って来たのかも、はっきりはわかりません。」

（五霊の椿のことについて何か事情を知っている人は他にありませんか?）

「小沼さんはサツキが好きで椿も好きな方で、この木の実生を育てたりしています。五霊の椿のことに、詳しい方です。」以上小松崎さんのお話（平成 30 年 8 月 7 日）。

当時岩間町の教育委員会の関係者であったという、小沼勝男さんにも話を聞きました。（電話）「昭和 48 年頃この椿を知った。変わった花の椿だと聞いてはいたが、だれも品種名は分からなかった。園芸関係の本などを読んで、伊勢地方に多い「紅唐子」だと分かった。」（紅唐子と同定したのは小沼氏であるご本人に確認。）「また先祖が伊勢神宮参りをしたと聞いたので、（伊勢地方から）旧正月頃に大根に刺して持ってきて、挿し木したのだらうと推測した。木の西側の幹に枯れこみが入っていたが、2、3 年前に西側の長屋門やその回りに植えられていた植木などをかたづけただけのために、急に西日が直に幹にあたっただけの日焼けによるものだと思った。それまでの手入れで直径 5cm ぐらいの枝を切り落とすようなこともあったようで、幹はごつごつしていた。幹周り 1m ぐらい、直径は 30cm ぐらいあり、根本からひこばえが何本もでていた。幹に力をつけるために、ひこばえを元から切り取り 100 本ぐらい挿木をした。葉は艶があって丸形で先がとがっている。（葉が大きい椿ですか、と聞くと）土が黒墨で良いので、この地では椿が良く育つのです。」

（他に大きな椿を知りませんかと聞くと）「友部町の常磐線を西側に見て国道 355 号線近くに荻屋商店というのがある、今でもあるかどうか分からないが、そこから少し下ったところを、左（東）に少し入った所の民家にも同じ紅唐子の大きな木が有るのを見ている、この木は今でもあると思う。」と教えてくれました。そこまでお話を聞いてお疲れの様子なので、お礼を言って電話を切りました（8 月 8 日）。

後日、小松崎さんのお宅を訪ねて枯れた椿の木の残骸を見せてもらいました（8 月 20 日）。その場所には、老木を支えていた鉄製の支柱が残されたままに後代の挿し木が 3 本植えられて大きく育っていました。五霊の椿はその 3 本の真ん中あたりから急な斜面に従うように少し斜めに道路のほうに幹を伸ばしていたそうです。最近、イノシシに掘り返されたという根元部分は少し穴があいていて、うるこ（地元の言葉で空洞のこと）は地中まで達していたことがわかりました。辛うじて最後まで生きていた外周部分が完全には朽ち果てずに、土

中に腐って残っていたのに対して中央部は全くなにもありませんでした。幹の枯れこみは、木の衰弱が表に現れるよりずっと以前から進んでいて、洞はかなり以前から出来ていたと推測されます。

小松崎さんに元気だったころの五霊の椿の写真を見せてもらいました。たくさん花を着けている見事な咲振りですが、幹は太くごつごつとしていて老木であったことが写真からもわかりました（写真2）。



写真2 五霊の椿

高源寺の和尚さんの話のもう一本の紅唐子は、お寺に植えられているのではなく、この個人宅の五霊の椿のことであったとして間違いはなさそうです。しかし、どちらも同じ紅唐子ですから同じような経緯で持ち込まれたのかもしれないとも考えて調べてみましたが、皆さんの話を総合して考えてみても、どうも直接的には関連性がないように思われます。さらに調査する必要があるようです。

終わりに



ところで、この取手市高源寺の椿については五霊の椿と全く違う点がある。もうひとつ有ることに私は気付いていました。この老木の根は斜面にあるために一部が地上に露出していると言いました。通路から左右に広がっている根のそこそこに根から直接芽が伸びあがって小木となって、この春にも花を咲かせていたのでしょう、いくつも実をつけていました。その果実の感じがしばしば萼を付けている紅唐子のもので違っていました。葉も違います。幹が根に変わる部分をよく見るとほぼ水平に筋があることに気が付きます。つまり、根と幹が別のツバキなのです。五霊の椿の木は挿し木だったのですが、この高源寺の木は接ぎ木なのです（写真3）。



写真3 接木の跡

さて、近世初頭の京都における椿愛好（森末義彰 1970年）には椿マニアのお公家さんの日記（資勝卿記 1619~38年 など）が紹介されています。これによると珍しい椿品種を接ぎ木してやり取りしていたことがよく行われていたことがわかります。多くは寄せ接ぎで、欲しい椿がある人は台木を送って接ぎ木してもらっていたようです。考えてみると挿し木よりは接ぎ木のほうが早く確実にしっかりした苗が作れるし、貰った方もすぐに花を見ることが出来たでしょう。この当時の貴重な椿は接ぎ木仕立てだったと考えることができます。

このような時代背景からしても、この高源寺の木は接木の技術が進んでいた上方から接木の苗木で運ばれて来た可能性が高いと言えそうです。一方、挿し木や枝で持って来たものであるとすると何処かで接がれたこととなります。関東地方に寄せ接ぎや、今でいうピン接ぎの技術が江戸時代の初め頃からあったと考えられなくはありません。

いずれにしろ、これほど古いと考えられる椿の古木に、接ぎ木のものがある

ことを聞いたことが無いように思います。私は経験からこの木の樹齢を 400 年以上と推定しています。園芸品種の中でも、それほど育ちの良い、幹の太りの早い品種ではないからです。この木が 400 年も前から接ぎ木が行われていたということを実際に証明しているということができます。そういう意味でこの高源寺の椿は椿古品種の大木というだけにとどまらず、日本の園芸技術の生き証人として重要な樹木ということができます。

さらに、先日(8月20日)高源寺の一磨和尚に直接お話しをうかがう事ができました。この時「京都東山からもってきたというのですが、京都の椿というのではなく、伊勢の椿と聞いている。」と和尚は言われたのです。それを聞いた時、古品種の研究者は 400 年の時をこえて「伊勢椿」が忽然と眼前に姿を現したかのように感じました。和尚のお話は、400 年前のその当時の西国での通り名(園芸名)がはっきりと東国にまで伝えられていたことを窺わせるものだからです。著者はこの椿が京都から旅立つときにも、また高源寺に植えられた時にも伊勢椿と呼ばれていたことに間違いのないと思うのです。ここに述べた時代考証や推定される樹齢などに鑑みても高源寺の椿は紅唐子の古木というよりも「伊勢椿」の最後の一本と考えられます。これらの考察から著者はこの椿が天然記念物であるということは元より、それに加えて園芸研究上の貴重な文化遺産として捉えるべきだと考える様になりました。(接ぎ木の技術)

(この小文は特に園芸文化的な立場からの考察なので、植物学的な感じの強い、「ツバキ」、「ベニカラコ」は用いませんでした。同じ理由で園芸品種名をカタカナで表記するべきではないと考えています。ご理解ください。また、引用は原文に従いました。)

(取材協力者 山田長政さんを偲んで。2023 年 9 月 2 日 )